

インドにおける博物館及び現地での展示調査とジャータカの図像表現に関する図像の収集

出倉 千尋 (人間社会環境研究科 博士前期課程 2 年)

1. 調査概要

報告者は、「シビジャータカの図像表現の伝播と変容」と題した修士論文で、ジャータカ図像の表現について時代的、地域的な相違を分析してきたが、その過程でインド国内のジャータカ図像を収集する必要性が生じた。それに伴い、博物館または発見された現地での展示状況について、実態を把握し、今後の研究に生かす目的で調査を行った。

ジャータカの作例は、主にパールフット（マディヤ・プラデーシュ州）、アマラーヴァティー（タミル・ナドゥ州）、マトゥラー（ウッタール・プラデーシュ州）、ガンダーラ（アフガニスタン東部及びパキスタン北西部）等から出土している。これらの地域から出土した作例の多くは浮彫り彫刻であり、各地の博物館に収蔵、保管されている。また、アジャンター石窟寺院は、インドでは唯一ジャータカを主題とする壁画作例が残る遺跡であるため、ジャータカの図像収集において重要である。さらに、発掘された石窟内で作例を展示していることから、博物館での展示との違いについても調査の必要があると考え、今回の調査対象に加えた。

調査の派遣日程は平成 22 年 8 月 16 日から平成 22 年 9 月 20 日の 36 日間であり、調査対象としたジャータカの図像を所蔵する博物館及び遺跡は以下の表の通りである。

表に挙げた博物館は、いずれも複数の地域から発掘された遺物を収蔵、保管している。インドにおける遺物の展示は、アジャンター石窟寺院遺跡のように遺物がそのまま遺跡の一部として管理、保存されている場

合と、博物館に保管されている場合がある。今回の調査では、修士論文との関係が深い遺跡を念頭に置き、上述の博物館と遺跡を調査対象とした。

2. 調査結果

今回の調査の目的は、ジャータカの図像作例の収集、及び博物館の展示方法や展示空間について、日本の博物館と比較するべく分析を行うことである。作例の収集に関しては、実際に博物館に赴き展示を見することで、作例の詳細の確認や写真撮影による記録を行った。

博物館の調査では、以下の点に着目し調査した。

① 収集の対象物

② 展示方法

具体的には、①では各博物館のテーマや収集物に注目し、それらの作例がどのように分類され配置されているのかを分析する。②では、展示物と展示方法の関係について考察する。例えば、採光や照明、空調、展示台やガラスケースといった展示に必要な設備の使い方や客の動線などに注目した。以下に各博物館及び遺跡での展示について、調査の結果を述べる。特に、各博物館の主要な展示物に関する展示方法に注目し分析する。

・タミル・ナドゥ州立博物館（写真 1）

① タミル・ナドゥ州とその周辺、南インドの遺跡から発掘された遺物を収集し展示している。展示施設は、主に発掘された彫刻やインドの自然史をテーマとした本館以外に、工芸品、ブロンズ、伝統的な絵画作品、現代美術など展示物の分類によって 6 つの建物にそれぞれ展示されている。その

施設名称	所在	日程
タミル・ナドゥ州立博物館	タミル・ナドゥ州チェンナイ市	8 月 20 日～25 日
インド博物館	西ベンガル州コルカタ市	8 月 26 日～31 日
インド国立博物館	デリー市	9 月 1 日～5 日
マトゥラー考古博物館	ウッタール・プラデーシュ州マトゥラー市	9 月 7 日
アジャンター石窟寺院遺跡	マハーラーシュトラ州アウランガバード県	9 月 8 日～16 日
プリンス・オブ・ウェールズ博物館	マハーラーシュトラ州ムンバイ市	9 月 17 日～18 日



写真1 タミル・ナドゥ州立博物館



写真2 石彫展示例

中でも中心となるのは、本館のアマラーヴァティー大塔遺跡から運び込まれた石彫と、南インドでの出土品を主としたブロンズ像のコレクションである。

- ② 本館は石彫を展示している。石彫は、絵画ほど光や空調による影響を受けないためか、入口から展示室の間には壁がなく室内の空調も特に管理されていない。室内左右の壁面には大きな窓が設けられ、自然光をふんだんに取り入れているため室内は比較的明るい。天井には蛍光灯とスポットライトが設置されているが、報告者が訪れた際は後者のみが使用されていた（写真2）。

アマラーヴァティー彫刻の展示室は2年程前から改装工事が続いており、調査当時も工事のため展示室に入ることはできなかった。その他の石彫では、像高が1メートル程度の大きな作品は木製の平台あるいは床上に直接置かれ、30センチ程度の比較的小さな作品は展示台を用い、大人の目線に合わせた高さに設置されており、いずれの場合もガラスケースは使用されていない。作品は出土地や遺跡ごとに分類・配置されているが、展示室

の大きさに対して展示物の数が多く、展示物と客の距離が近いように感じた。

ブロンズ展示室は入口と展示室が仕切られ、空調も管理されている。窓は設置されておらず、蛍光灯やスポットライトなどの人工照明を用いている。ブロンズ像はそれぞれ展示台に置かれ、ガラスケースが設置されている。この展示室のメインであるナタラージャ像は部屋の奥の一段高い展示台に置かれており、必要以上の照明が使用されている。そのため、他の作品のガラスケースにその光が反射し、細部の鑑賞が難しい。石彫展示室と比べると、作品の数と展示室の大きさはバランスが良く、室内をぐるりと一周できるシンプルな動線で分かりやすい展示であると感じた。

・インド博物館

- ① 博物館の1階は考古学に関する作品が展示されている。代表的な展示物は彫刻が施されたパールフット遺跡の塔門と欄楯である。古代インド美術が発展したマトウラーから出土した彫刻も多く、その他ガンダーラ地域の出土品やパーラ朝時代の作品なども展示されている。2階には絵画や化石、生物史に関する展示が見られる。特に絵画はベンガル地方の作品を中心に収集されている。
- ② 建物は中庭を囲んだ吹き抜けになっており、それに沿って通路、展示室が作られている（写真3）。通路にも石彫が展示されているが、いずれも14～16世紀頃の比較的重要度が低い作品である。展示室には窓がなく、人工照明を使用しているが、通路への出入口は解放され、入口付近のみ自然光が入る。また、空調管理は特にされていない。蛍光灯は設置されているが、本数が少ないためかや



写真3 インド博物館1階通路

や暗い。しかし、スポットライトも併用されているため、作品を鑑賞する妨げにはなっていない。また、列柱などの裏面にも彫刻が施されている展示物には鏡が使用されている。ガンダーラ彫刻は全てショーケース（ガラスケース付きの展示台）が使用されているが、内部の照明の青みが強く、石彫本来の色未とは違って見えてしまう。ガンダーラ以外の石彫は展示台や平台に置かれているだけで、ガラスケースやロープによる保護はされおらず、監視員が客に対して注意している場面は何度か見られた。

パールフット彫刻は専用の展示室が設けられ、空調管理された室内に塔門と欄楯が建っている。天井には蛍光灯とスポットライトが設置され、その他の石彫展示室よりも明るい。実物を明るい空間で、間近で見ることができるため、博物館にいながらにして遺跡のスケールや彫刻の質感を感じることができる展示である。しかし、展示物の大きさに対し展示室が小さく、高さのある塔門を見る際に適度な距離をとり辛い（写真4）。

・インド国立博物館

- ① インダス文明から現在に至るインドの絵画、美術品、工芸品、文書を収蔵しているほか、インド

海軍に関する展示や、中央アジアの出土品や西洋美術などに関するコレクションも展示している。

1階は考古学に関するコレクションが展示され、インダス文明の遺物からクシャーナ朝やグプタ朝時代の仏教彫刻、中世ヒンドゥー教美術作品などを、時代ごとに順に追っていくような構造になっている。

2階は展示室ごとに、細密画や中央アジアから出土した遺物が展示されている。中でも細密画のスペースが大きく、主要なコレクションのひとつなのだろう。また、3階には海軍に関するものやコイン、工芸品などが置かれ、それらを通して時代の変化を追うような展示になっている。

- ② インダス文明に関する展示では、展示物はすべて壁面あるいは独立型のショーケース内に置かれている。独立型のショーケースによって展示室内に仕切りを作り、客の動線を作り出していた。また、壁で展示室を仕切ってしまうよりも、独立型のケースをうまく利用することで、空間が広く感じられるうえに展示物を様々な方向から鑑賞できるという利点がある。

ブロンズ像も壁面に設置されたガラスケース内に収められているが、石彫作品はほとんどが展示台に置かれているだけで、ロープやガラスケースは



写真4 インド博物館、パールフット展示室



写真5 インド国立博物館 1階展示室

使用されていない。レリーフなどは展示台に置かれたうえで壁面に金具で固定されている（写真5）。各展示室には監視兼警備を担当する職員が配置されており、客が展示物に触れようとするとき注意している姿が見られた。

どの展示室も窓はなく、蛍光灯とスポットライトを併用しているが、インダス文明や仏教彫刻の展示室は壁面が白く、スポットライトも白色光を使用しているため非常に明るく感じられた。それに対し、ヒンドゥー教彫刻の展示室の壁面は赤みがかっており、黄色味の強いスポットライトを使用しているためか前者よりも室内が暗く感じられた（写真6）。1階のインダス文明、仏教美術、ヒンドゥー教美術の展示室はひと繋がりになっているため、非常に多くの展示物を一度に見てしまわなければならない。展示物が多く鑑賞に時間を要するため、鑑賞者の負担が大きいことを考慮してか、各展示室には必ず椅子が置かれている。

インドは停電が多いのだが、報告者が訪れた際も停電し、展示室内が真っ暗になってしまった。監視員が懐中電灯を持って誘導してくれたため通路に出ることができたが、非常灯などは見られなかった。



写真6 インド国立博物館 1階展示室

・プリンス・オブ・ウェールズ博物館

① これまで見てきた博物館は公立施設だったが、この博物館は私設であるため、展示物はタタ財閥が収集していた個人コレクションである。特に細密画のコレクションはインド国内でも随一と言われ、館の中心的な展示物となっている。また、マハーラーシュトラ州内だけでなく、インド各地やチベットからも収集した宗教美術作品が多く展示されている。

1階には石彫やブロンズ像が展示されている。外に開いた通路にも石彫が置かれているが、いずれも14～16世紀頃の作品であり、作品として重要度の低いものを置いていると考えられる。

展示室にはヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教の彫刻作品がある程度分類されて並んでいる。7世紀頃のシヴァ神と16世紀頃のナンディン（牛）が組み合わせて展示されるなど、あまり明確に地域や年代で分類・展示しているようではなかった。

2階は細密画の展示がメインだが、それ以外にもチベットやネパールの仏教美術作品、鎧や剣、などの武具、宝飾品なども展示されている。

② 石彫作品は、ガンダーラ地方出土のもの以外は平台や展示台にそのまま置かれている。展示されている部屋には大きな窓があり、自然光がふんだ



写真7 プリンズ・オブ・ウェールズ博物館、石彫展示室

んに入るため明るい、スポットライトも設置されている（写真7）。

エントランスホールの壁面にはガラスケースが設置され、ブロンズ像や刺繍・木工品などが展示されている。

細密画はすべて額装で、展示室には窓はなく蛍光灯とスポットライトを使用している。製造工程の映像資料や、道具、表現されている説話の内容を説明したパネルを用いた展示がなされ、展示物の中でも特に重要なコレクションであることが伺える。

・マトゥラー博物館（写真8）

- ① マトゥラー周辺地域の遺跡からの出土品が展示されている。展示室は大きく2つに分かれ、石彫展示室とブロンズ展示室がある。遺跡ごとにある程度まとめて並べられている。

また、中庭を囲んだ通路には石彫作品が並んでいる。

- ② 建物は中庭をぐるりと囲んだ円形をしているた



写真8 マトゥラー考古学博物館外観



写真9 マトゥラー考古学博物館通路



写真10 マトゥラー考古学博物館、石彫展示室

め、展示室も円に沿ってカーブした形をしている（写真9）。両壁面には多くの窓があり自然光が入り込むため明るく、蛍光灯は設置されているが使用していなかった。建物の出入口と庭への出入口が開け放され、天井も高いため非常に開放感のある展示室である。展示物の数が多いが、窮屈には感じない。入口側の壁面には小展示室と言えるような、「仏像」や「シヴァ像」のように、像の主題別に7～10体の彫像をまとめて展示している空間がある。また、列柱は遺跡のように並べて配置されたり（写真10）、横梁は目線よりも高い位置に置かれたりと、展示に工夫も見られた。

・アジャンター石窟寺院

- ① これまで見てきた博物館での展示とは違い、発掘された現地での展示であるアジャンター石窟寺院遺跡では、石窟そのものが展示物であるとともに、展示室でもある。石窟内外に施された彫刻や窟内の壁画を現地で直接鑑賞することができる。アジャンターには30窟の石窟があり、造営年代から前期（紀元前1世紀～紀元後2世紀）と後期（5～6世紀）に分けられる。第9、10、12、13、15A窟が前期窟、残りが全て後期窟である。アジャンターはインド国内ではほとんど唯一古代壁画が残る遺跡であり、特に第1、2、10、16、17窟には壁画が多く残っている。
- ② 窟内は入口のある一方向からの光以外は自然光が一切入らず非常に暗いため、照明が設置されている。しかし、壁画を保護するために照明への規制が厳しく、使用していても窟内は薄暗い（写真11）。客が懐中電灯を使うことも禁止しており、彫刻や壁画を詳細に鑑賞することは難しい。



写真 11 アジャンター第1窟



写真 12 アジャンター第17窟正面入口

博物館の展示とは違い、実物の石窟の中に入り内部を鑑賞することになるため、職員が常に監視し来場者の行動を規制している。

例えば、壁画が多く残る石窟では窟内の温度や湿度を保つために、一度に入場する人数が大体決められており、客が列を作って待っている場面が見られた。また、壁画が触られ傷つけられることを防ぐために、ポールや鎖、板などで柵を作り人が壁画に一定の距離以上近づけないようになっている。さらに、石窟の入口には木製の扉が取り付けられ、遺跡への出入りを制限したり（写真 12）、石窟正面にシートを張り、風雨を防いだりして石窟を保護している。

アジャンターは川に沿った岸壁にあるため階段が多いのだが、階段の上り下りが難しい人は、4人がかりで運んでくれる椅子を利用して遺跡を回ることができる。

遺跡そのものが展示空間であるアジャンターでは、展示と並行して保存も行わなければならない。客の行動を規制することも保存のために必要なことの一つである。さらに、遺跡周囲の環境へも配

慮が必要である。例えば、アジャンターでは遺跡から4キロメートル程離れた場所にバス停が設けられ、バス停から遺跡入口まではシャトルバスを使用している。また、遺跡内には各所にゴミ箱が設置されているため、ゴミの投棄も防いでいる。このような環境保護を行いつつ、壁画の保存のために科学的な調査研究や壁画の剥落を防ぐための固定作業なども行われている。

以上、それぞれの博物館及び遺跡の調査結果を述べた。さらに②に関する点として、施設の入場料についても気づいた点がある。上記の施設の入場料は、大人、子ども、学生などの区分があるが、それ以外にインド人と外国人で料金は違ってくる。インド人の大人であれば5～15ルピー（日本円にして10～30円）であるのに対し、外国人の大人は150～300ルピー（日本円にして300～600円）と大きく違う。また、アジャンター石窟寺院の入場料金にはSAARC及びBIMSTECという項目があり、バングラデシュ、ネパール、ブータン、スリランカ、パキスタン、アフガニスタン、モルディブ、タイ、ミャンマーからの旅行者はインド人と同じ料金で入場することができる。

3. 成果と展望

今回の博物館調査の結果から、次のようなことが言える。まず、石彫作品は基本的にガラスケースを用いず、窓のある展示室におかれ、自然光を利用した屋外に近い環境で展示されていることが多い。調査に訪れた博物館では、庭に面した通路にも石彫が展示されていた。特にインド国立博物館では、比較的新しい年代の石彫作品が屋外にそのまま展示されており、風雨にさらされたために損傷してしまっている作品も見られた。

それに対し、ブロンズ像はどの博物館でもガラスケースに入れられ、展示室内は空調管理されていた。また、石彫展示室よりも窓の少ない、あるいは窓のない展示室で人工照明を用いた展示をしている場合が多い。

細密画などの絵画作品も額装に入れられ、同じく窓のない展示室で人工照明のみを用い展示されている。アジャンター壁画の場合は、損傷の著しいものはガラスケースが設置されていた（写真 13）。光やそれに伴う熱による損傷を防ぐために、壁画の多い石窟は特に



写真13 アジャンター第10窟右壁

照明が弱く、詳細な鑑賞が難しいほどである。同様に、絵画作品の場合も自然光や人の手に触れられることによる損傷を防ぐために額装に入れ、アジャンター壁画ほどではないが、展示室内の照明は控えめにし、作品にはスポットライトを使用した展示方法をとっていると考えられる。

日本の博物館、例えば石川県立美術館や奈良国立博物館、京都国立博物館などでは、展示物の扱いがインドとは異なる点がいくつかある。

基本的にどの展示室にも窓はなく、人工照明を用いている。また、石彫であってもブロンズであっても、展示物はほとんどの場合ガラスケース付きの展示台に入れられ、素材によって照明の明るさや種類が異なっている。石川県立美術館では、現代の彫刻作品の一部が館内の通路に展示されていた。ガラスケースを用いず、展示代に固定してある状態だが、インドのように展示物が外気に直接触れるような展示ではない。

今回調査で訪れたインドの博物館では、基本的に展示替えや企画展は行われず、常に同じ展示物が並んでいるが、日本の博物館では一定の期間で展示替えが行われ、上に挙げた博物館では企画展も頻繁に開催されている。つまり、収蔵品は規定された期間のみ展示され、それ以外の期間は適度な温室度に保たれた収蔵庫に保管されている。

写真撮影が許可されている点は日本の博物館とは大きく異なる。インドの博物館では、入場料とは別に料金を払うと写真撮影許可証がもらえ、館内や展示物を撮影することができる。当然フラッシュは禁止されているが、インド博物館やインド国立博物館では三脚も使用できる。

博物館の展示は、展示物に添えられたキャプションだけでは説明し難い。日本の博物館のように、インド



写真14 プリンス・オブ・ウェールズ博物館

でも有料のオーディオガイドを活用している。公用語である英語とヒンディー語によるものが多いが、プリンス・オブ・ウェールズ博物館では日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語にも対応している（写真14）。

保存と展示は相反するものであり、両立は難しい。日本では、可能な限り収蔵品の損傷を抑え、状態を維持するか、場合によっては破損部などを修復する。修復の際は残存部分に影響のないように、また修復箇所が見分けられるように意識した方法で修復を行う。今後より優れた修復方法が開発された場合に備えるという意味もあるのだろうが、修復箇所も作品の一部として捉え、時間の経過自体に価値を見出す傾向があるとも言えるだろう。また、収蔵庫だけでなく展示室や展示ケース内の温室度、照明にも細かく配慮するということは、それだけ収蔵品の保存を重要視しているといえることができる。

収蔵品の保存に重点を置くと、作品にとって良好な環境を維持するための設備が必要となり、最適な環境を目指すほどに博物館の運営費用は比例して大きくなるはずである。日本の博物館は収蔵品の保存を重視しているため、その分運営費用がかかり、入場料の収入も重要になっていると考えられる。日本の博物館の入館料は、先に挙げた施設では大人で500～1200円であり、気軽に支払える金額とはいえないのではないだろうか。しかしその分、収蔵品は良好な環境に置かれ、高い技術のもとで修復がなされる。展示物は温室度が管理された空間で、ガラスケースや免震台などを用いて安全に展示される。照明に関しても、作品を痛めることがないように配慮するとともに、作品鑑賞に適した配置が考慮されている。

それに対し、インドの博物館は日本ほど充実した設

備がない。石彫の場合は屋外に置かれる場合もあり、展示室内の作品も、例えばヒンドゥー教の神像などは来館者が手を触れてしまうこともある。「保存」という点で見ると、日本ほど意識が高いとは言えないだろう。また、「展示」の面でも照明の角度や光量に細かく配慮しているわけではなく、ガラスケースに反射し鑑賞の妨げになっている場面もよく見かけた。展示物の配置もバランスが良いとはいえず、キャプションの情報量も出土地と大まかな年代、「仏像」や「シヴァ神」などの名称のみであったため物足りなく感じた。

遺物を保存するという視点で見れば、あまり意識が高いとは言えないかもしれない。しかし、視点を変えて博物館の入館料について考えると、インドは日本よりも国内からの来館者の負担が少ない。つまり、自国の遺物を自国の人々により広く公開していると言うことができるのではないだろうか。旅行者にとっては、外国人であるというだけでインド人よりも高額な料金を払わなければならないという不満を感じるかもしれないが、日本の博物館ほど物々しい雰囲気はなく、より開かれていると言うことができ、自国の美術作品に対して親近感を持ちやすい環境であるのではないだろうか。

今回の調査結果をもとにインドの主要な博物館の展示物及び展示方法について分析し、日本の博物館との相違点や共通点について考察した。インドの博物館を見ることによって、日本の博物館がいかに収蔵品の保存を重要視しているかを理解することができた。今後は本調査から得た情報や自身の考察も参考とし、保存と展示の最良のバランスを考えていきたい。

また、本調査で得たジャータカ作例の資料は、アマラーヴァティー、マトウラー、ガンダーラ、アジャンターそれぞれの地域の図像的特徴を分析する際に用い、修士論文の一部とする。